

どっぴん

先日、小学校時代によくやって
いた「どっぴん」というボール遊びにつ

いて、東京の人と話をしようとしたら、全く通じなかった（私は京都市出身です）。地面にひとり分で一辺一メートルくらいのハコを、二人なら「田」、四人なら「田」のような形で書いて、その中に入って、一度落ちて（へそぐらいの高さに）跳ね上がったドッジボールを（両）手で打って相手のハコの中へ返す遊びだ。跳ねるとき「どっ」、手で打つとき「ぴん」という音がある。ほかの呼び方をする地方、そもそもそのような遊びがない地方、などいろいろあるようだ。

そういえば、捕まえる方と逃げる方に分かれて遊ぶ鬼ごつこのような遊びも地方によって名称が違つ。警察と泥棒に分かれる、「けいじ泥警」「どろけい泥警」「どろしゅ泥巡

などさまざまな名称がある。私が小さいころは「探偵」と言っていた。

学校関係の言葉にも地域差がある。例えば、黒板消しのことを鹿児島では「ラーフル」と呼ぶ。富山では模造紙のことを「ガンピ」という。「雁皮紙」という和紙との関わりはわからない。愛知では授業の間の休み時間のことを「放課」という。ほかの地方の人が聞けば「放課後」と誤解しそうだ。

そう、方言差は時に誤解の元ともなる。以前、宮城県内のお店で「安売りをしていました」という案内を聞いたことがある。「安売りをしていました。でも、もう終わり。ざんねーん！」といった意地悪な意味なのかなと一瞬思ったのだが、よく見ると、安売りをしている最中。東北方言の一部では、状態を表す述語に「〜た」をつけた表

現を、現在のことについても使うことがあるのだ。実は、震災のとき、テレビニュースのインタビューで、確か「ガソリン欲しかった」というような地元

の方言話者の表現を耳にしたことがある（あつた？…共通語でも「た」の有無に迷うことはありますね）。直後の段階だったから、もしかすると話し手は「今も欲しい」という意味で言っていたのかもしれない。本当のところはどうだったのだろう。

地方の言葉や文化の違いを意識化することは大切なことだ。誤解も防げるかもしれない。地方の伝統にしっかりと敬意をもちつつ、違うことの大切さ、おもしろさを共有できればいいなと思う。ついでに「地域の遊び」も共有したい。ああ、なんだか、久しぶりに、どっぴんがやりたくなってきたなあ。

早稲田大学教授

森山卓郎
もりやま たくろう